

邑久光明園への就職以前における森 幹郎の闘病生活とキリスト教無教会派信仰

○ 中京大学 中嶋 洋 (会員番号 005048)

キーワード: 森 幹郎, 政池 仁, キリスト教無教会派

1. 研究目的

1968 (昭和 43) 年 4 月に老人福祉専門官 (初代) を拝命した森 幹郎 (1923.5.29～2012.2.7, 以下, 森) は, 各地での講演会, 座談会, 視察, 調査・研究など, 幅広く活躍し, 板山賢治が, 「森さんはのちに日本初の老人福祉専門官となり, 日本の老人福祉の草創期におけるすばらしいパイオニア」と称賛するほど秀でていたとされる (板山 1997:98) . だが, いったいなぜ, 森は老人福祉の草創期に活躍でき, 称賛に値するような先駆的な仕事を成し得ていたのかということが判然としていない. そうした秀逸さの背景要因として, 福祉現場職員や行政官としての奮闘もさることながら, それ以前の青少年期や青春期の森の生活や思考の探究が重要であるが, これまで十分に解明されていない. 歴史研究では, 残存史資料の分析のみでは成り立ち難い複雑さや奥深さがあり, 可及的に遡り, 例えば, 史資料や既存の研究にない新たな視点からの考察や掘り下げが要となる. すなわち, 森自身にはのちに「濫救惰眠」論, 在宅福祉, 老人リハビリテーションなどを重視した老人福祉の新たな考え方につながる伏線が若かりし日々の思索や経験のなかにあったとするのが本稿の視点である.

その一例として, 日本学園 (旧制中学) 在学時にヨットやグライダーに熱中した森だが, グライダーの墜落事故により肋膜炎から肺結核となり, その後約 9 年間, 群馬県の榛名荘保養所 (のちの榛名荘病院, 通称, サナトリウム) で養生していた長い闘病期があった. 本発表では, 戦後日本の老人福祉行政施策の一端を担い, 在宅福祉やリハビリテーション, 自律の意義を殊の外, 強調した人物として森を位置づけ, 戦後の 1940 年代半ば頃から邑久光明園に就職する 1953 (昭和 28) 年 4 月の前までを主な検討時期とし, そこでの森の信仰生活や熟考の影響を明らかにすることで, 戦後日本の老人福祉行政施策の展開の基底の一端を具体的に・実証的に明らかにすることを目的とする.

2. 研究の視点および方法

上記の視点に基づき, 研究方法としては, 今回, 新たに着目した「森幹郎蔵書資料」一式 (ルーテル学院大学図書館所蔵) 及び森の第一次資料を主に分析する. 加えて, 史実を正確に把握するために年表及び人物相関図を作成し, 適宜, 参照した. さらに, 2025 (令和 7) 年 2 月 22 日に行った森のご子息 (ご長男) の森 望氏へのインタビュー調査の結果並びに「幹郎の人物研究」(2025 年 2 月 21 日付, 森 望氏による手記) をも引用する.

3. 倫理的配慮

倫理的配慮としては、「日本社会福祉学会研究倫理規程」に基づき、森関連の原資料及びインタビュー調査の結果の引用許可を調査当日に森 望氏から得た。本報告に関連して開示すべき COI 関係にある企業等はない。以下、Ⅱでは青年期における榛名荘保養所での闘病生活とキリスト教無教会派への信仰、Ⅲでは森のキリスト新聞社勤務時代と、「愛の友協会」設立を巡る長谷川茂代との協働、Ⅳでは森が考想したキリスト教社会福祉事業と、長島聖書学舎への期待について整理し、Ⅴでは家族4人における13年5ヶ月の幸福な生活と、妻、篤子の病死に直面した森の自省・思考を論考する。

4. 研究結果

森は榛名荘保養所での療養生活中に、内村鑑三や政池仁らから思想的影響を受けたことにより、無教会主義の基軸としての「獨立」の意義を認識することにつながった。さらに、療友、石川篤子との回復者同志の結婚が日常生活上のさらなる苦境へと彼らを追い遣ったが、13年5ヶ月という短くも幸福な結婚生活のなかで生まれた二児をはじめ、「感謝」「祈り」「協力」「同情」「情熱」などを森にもたらし、これらが豊かな生活感情の醸成や責任感の強化につながった。その背後には、どのような惨状にあったとしても、たとえ人種、場所、時代が変わっても祈ることで救われるという本来、一貫した無教会主義の考え方の影響を受けたことが、その後の彼の一本気な性格や信念の形成につながっていたと考えられる。また、「愛の友協会」設立を巡っては、長谷川茂代と見解を異にしながらも、あくまでも社会福祉事業とキリスト教信仰を区分けし、ニーズ充足や「一人の人」という視点を大切にすることこそが社会福祉事業の基礎・基本でなければならないと考想したことが、森の福祉観や老人福祉政策の基本的な考え方の土台の一端を形成することになった。

5. 考察

目前の人や物事を正しく把握したり、事象の根源を見抜く観察力・洞察力を向上させるためには、表層レベルや一方通行の把握ではなく、要援護者（当事者）を含む複層的な視点が重要となり、結核回復者や父子家庭の父親などの当事者の経験をした森の思想を考察した本発表では、法制化や福祉現場実践においては潜在化して見過ごされてきた事象や自明視されてきた事柄を新たな視点から捉え直したり、セルフ・ヘルプを機能させることで把捉していくことがいかに重要になるのかということの一端を例証した。

最後に、歴史的研究の成果や新知見を見出すには、未発掘の史資料や未知の視点からのアプローチが求められるものの、一方で、局所的な捉え方や物事への自明視による諸問題の後景化に留意しなければならず、改めて通説や定説の枠組みをていねいに問い直し、可及的に遡りつつ、新たな手がかりを得る手間を惜しんではならない。